

兒童藝術映面

文
部
省

推
薦

內
務
省
社
會
局

推
薦

文
部
省
認
定
映
畫

高保記



兒童藝術映面協會第一次回作品

兒童藝術映畫の目標

現代兒童藝術映畫の推移は、物質的に流れて、純眞なる兒童精神と離反するもの多し、而も映畫の感化影響の兒童精神を支配する事の驚くべきは、何人も首肯する處なれども、未だ其改革に努力せるものあるを聞かず、爲に社會的病患の胚胎する事深きを惧る我等茲に觀るごころあり、純眞なる兒童藝術映畫を提供し、不知不識のうち、兒童教化の爲に努力せん事を期す。

本映畫は文部省に於て推薦後 日本最初の認定映畫となりました。

内務省社會局が社會教化、兒童教化の映畫として推薦せられたのは此の『塙保己一』が最初の映畫であります。

又文部省に於ても、推薦映畫を超越して、認定映畫としたのは、今日まで映畫劇として、その例なく此の『塙保己一』を以つて嚆矢と致します。東京市社會教育課では目下此の映畫を、推薦映畫標準フィルムとして、數多い映畫製作業者の指針に供し、社會的教材として、ひろく一般に公開せんと計畫準備中であります。要するに此の映畫の出現は、日本に於ける兒童映畫の最高標準でありまして、^也絶對の追従を許さないものであります。

引續き本協會は、坪内逍遙博士、藤澤衛彦氏、野口雨情氏、北原白秋氏、沖野岩三郎氏、濱田廣介氏、本居長世氏等、童心に理解ある斯界の權威の作品を矢繼早に製作發表致します。

社団法人兒童藝術協會
兒童藝術映畫協會





兒童藝術映畫協會

第壹回作品

埜保己一

社團法人

兒童藝術協會

提供

映畫化

松竹キネマ株式會社 京都撮影所

作者

藤澤衛彦

監督

友成用三

技師

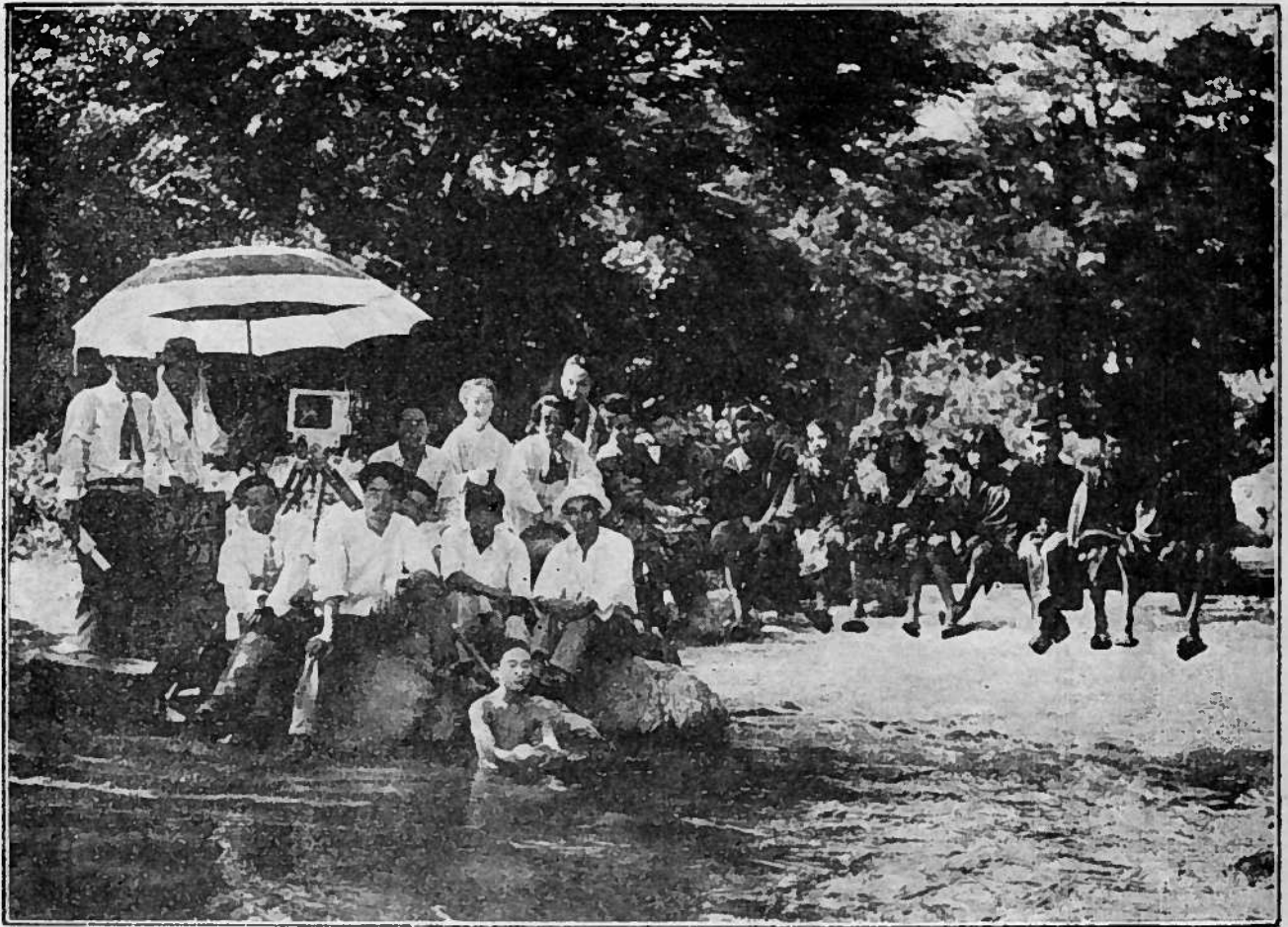
友成達雄

配役

辰之助
辰之助の母
絹商人
楠正成
楠正行
正行の母
長吉
軍談師
根岸肥前守
塙保己一



青木孝夫
中川芳江
大崎時一郎
市川傳之助
清水玲子
二條照子
都一男
百崎志摩夫
坪井哲
關操



埧保己一

原作 藤澤衛彦

一

手ひき 手々ひき

ひつくりかへつちや

ぶつたふじ

ひつくりかへつちや

ぶつたふじ

あて、、 チヨン

チヨン チヨン チヨン

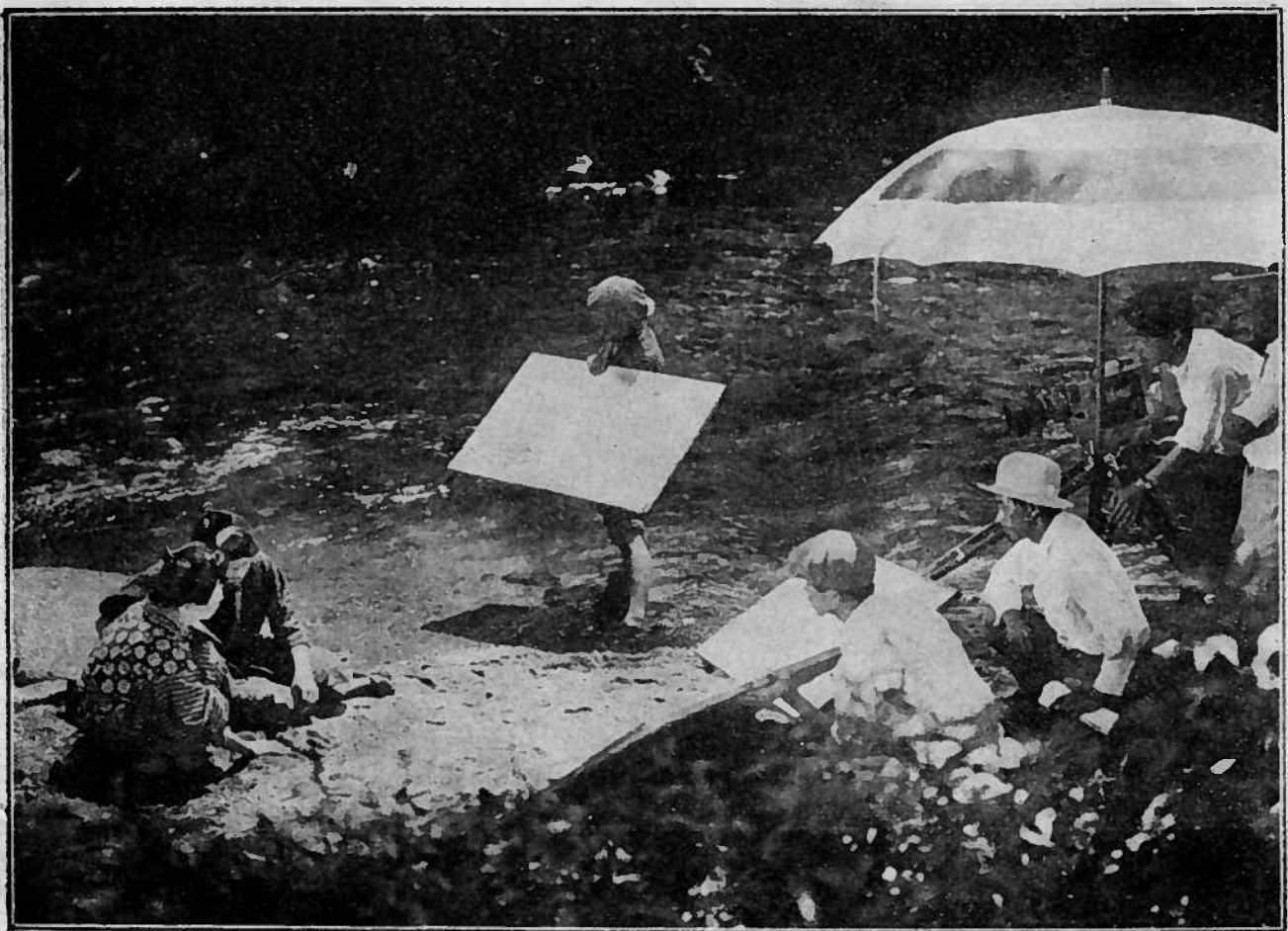
村を流れる小川にかゝつてゐる橋の上で、

おほ勢の子供たちが手へうしごりながら、葦

切鳥の歌をうたつてゐました、その中でも、

面白さうに聲をはりあげて、はやしたて、あ

るのは、長吉といふ餓鬼大將でした「さあ、



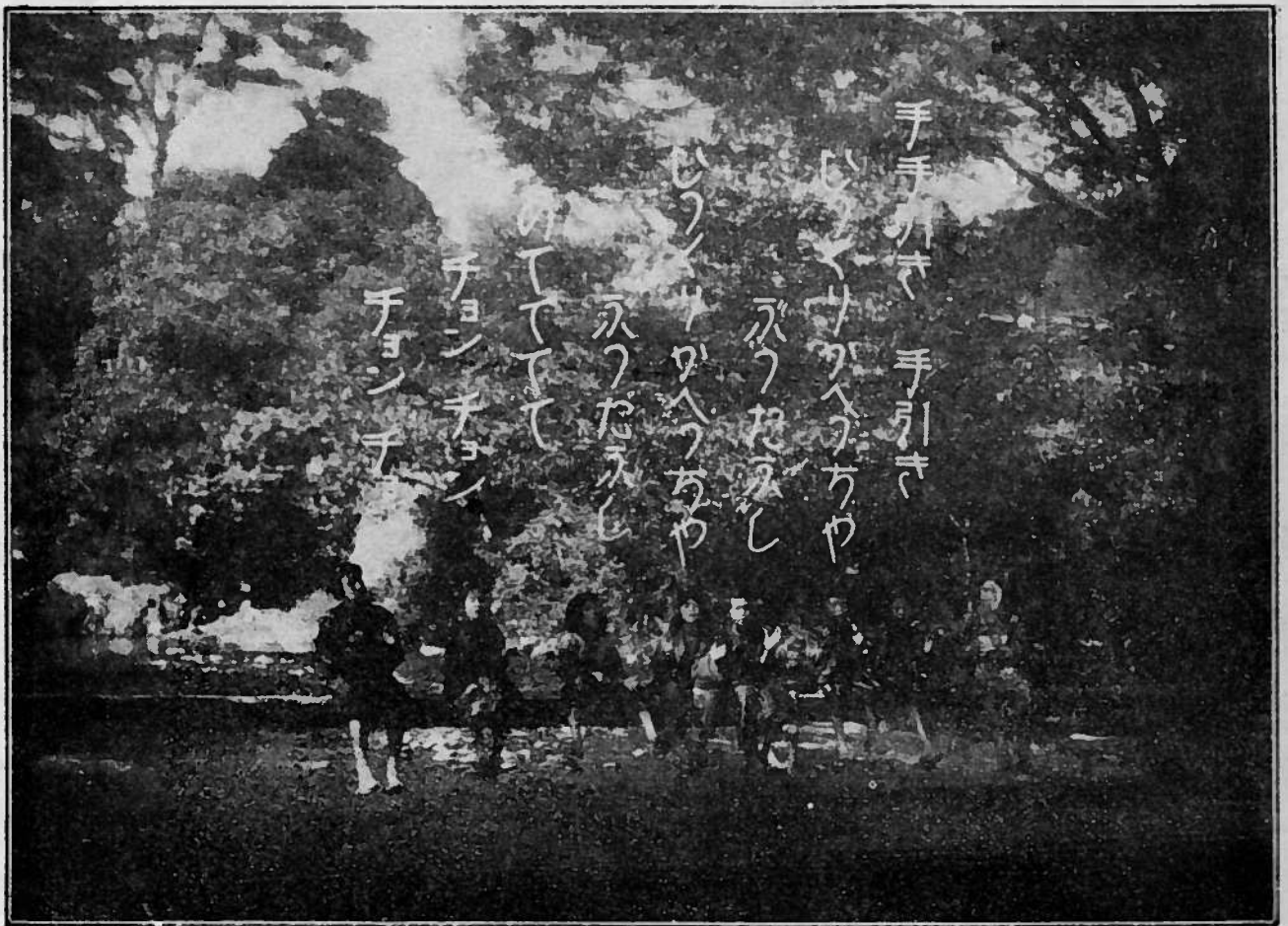
もう一度やらうよ」長吉はおんごをこつて、

手々ひき 手ひき

ひつくりかへつちや

ぶつたふじ

さうたひはじめました、小川の川下に、草深い一軒の百姓家がありました、その家のうらでは、水車が、音をたて、まはつてゐましたが、長吉等の唄は、そこまできこえてくるのでした「あ、またあの唄をうたつてゐる」さうつぶやきながら、うらめしさうに、齒をくいしばつたのは、母と二人、この家に住んでゐる辰之助といふ少年でした、辰之助は目が見えませんでした、ですから村の子供たちのやうに、かけだしたり、飛んだりするここができません、うつかりして、杖をわすれると、木にぶつかつたり、石につまづいた



手手引き 手引き

いんげんやうや

ぶつたえし

いんげんやうや

ぶつたえし

めててて

チヨンチヨン

チヨンチ

りして倒れることも、たびくありません、

ですから、唄にここよせて、辰之助をからか

ふには、よしきりの唄はもつてこいなのでし

た、辰之助がしほれてゐるのに気がついて、

お母さんが、聲をかけました「辰之助や、ご

うしたの」お母さんの、やさしい言葉をきく

と辰之助はいつそうかなしくなりました「い

いね、何でもありません」でもお前泣いて

ゐるのぢやあないの」「はい」辰之助はもう

こたねるのが、精いつばいで、もう胸のおく

から、こみあげてくる涙をおさへることか

さなくなつてしまひました「お母さん、あの

唄をきいてください、私が盲目なものですか

ら、みんなで、私をからかふのです、ごうせ

私は盲目です、人並ではないのです」辰之助
はお母さんにこりすがつて、口惜しさうに涙



をこぼすのでした、お母さんもさすがに目に露をやごしました、氣をひきたて、「つまらないことを氣にしてはいけませんよ、たごへ目が見えなくても、一生懸命になりさへすれば、自分の思ふことが出来ないわけはありません、支那の昔の話ですが……」辰之助のそばによつて話はじめました、それは深い山奥の出来ごとです、熊渠といふ人が、山を下つてくるこ、不意に一匹の虎が現れまして、たおごろいて、逃げやうごしました、虎はいまにも飛かゝらうご身がまえてゐます、もう逃げるこごもできないので熊渠は、覺悟をさだめ、全身の力でひきしぼつた矢を、虎にむけてヒユウと射放ちました、矢はねらひあやまたず、美事に虎の首につきさゝりました、がそれにしてはあつごも動かないので、不



議におもひ、恐るおそる側へ行つてみるこゝ、
虎に見わたしたのは岩で、矢はその岩につきささ、
つてゐたのでした。「おもふ念力、岩をも透
すといふ諺のこほり一心になれば、出来ない
ことなぞはありません。くよくよしてゐたり
忍耐や勇氣がないと、何事も駄目です」お母
さんの言葉には、力がこもつてゐました。辰
之助の顔はきうにいきく／＼としてきました。

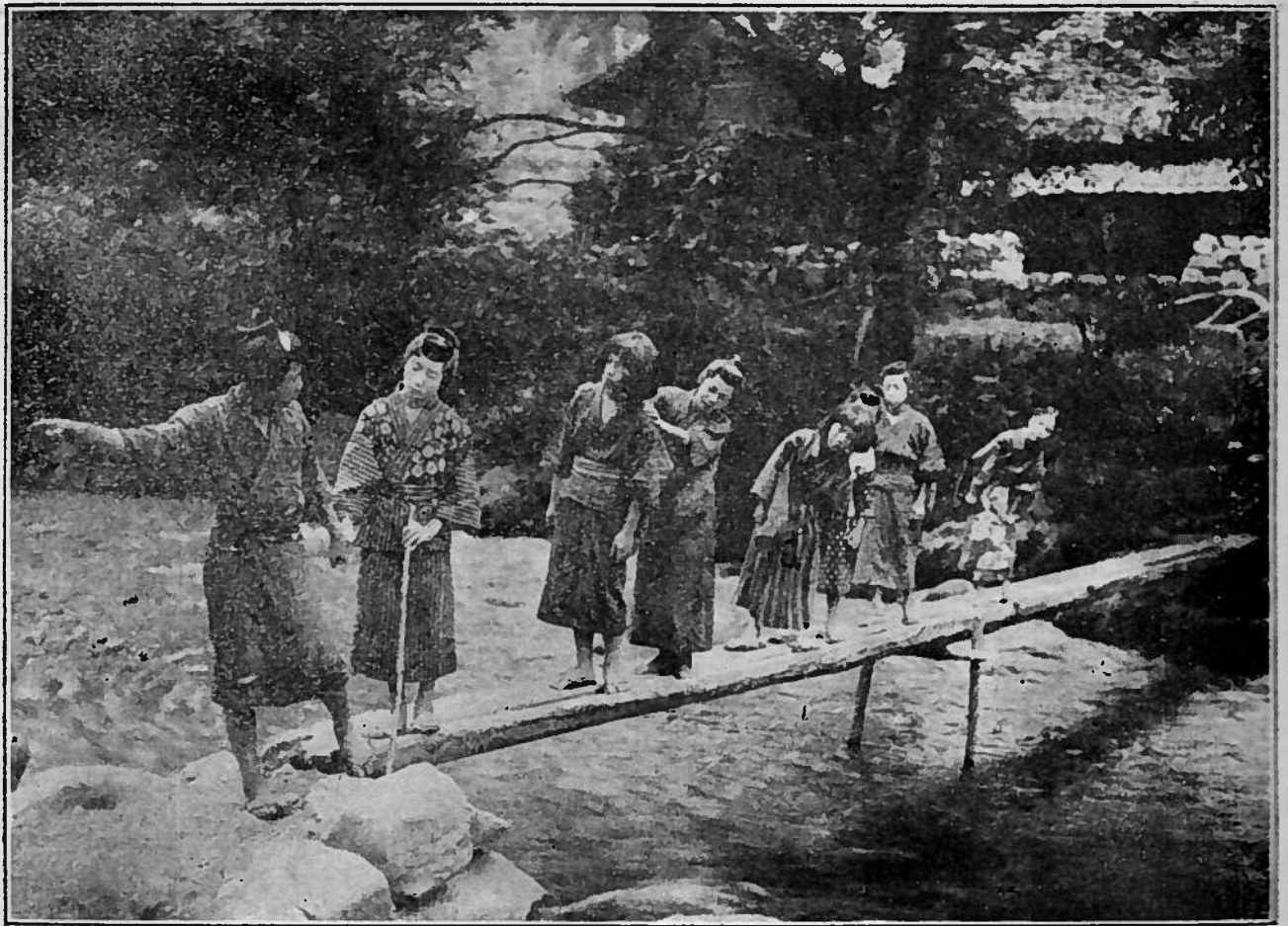
「私は學者になりたいのですが、ちやあ、一
心になれば目が見えなくても偉い學者になれ
るでしようか」「あゝ。なれるとも。きつと
なれますよ」辰之助はお母さんに勵まされて
此時ひそかに――よし、私は立派な學者に
なつて見せるぞつ――と胸のうちでつぶや
きました。辰之助は五才の時、千字文を暗記
し、七才の時には、もう「漢語大和故事」を



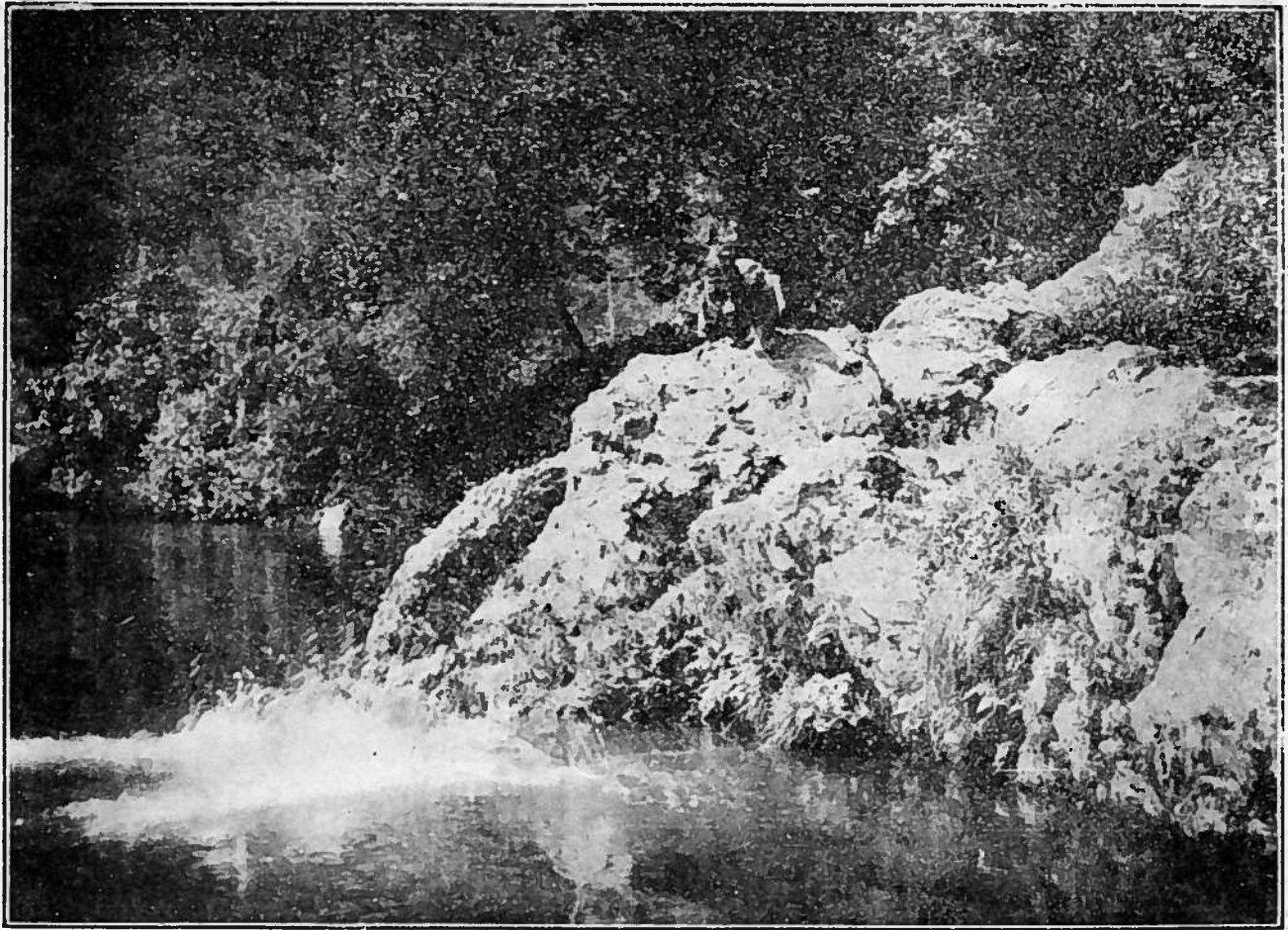
そらで覺おぼゆるてしまひました。

二

いたづらつ子の長吉は、唄うたひはやしてゐる
だけでは、ものたりなくなつて、辰之助たしのすけをた
うごう、遊あそびなかまにひつぱりだしました。
「さあお前まへこういふ字を知しつてゐるか」長吉ちやうきち
は、河瀬かほの砂すなの上に、「山やま」といふ字をかき
ました。辰之助たしのすけは見みえない目めを見みはるやうに
して手てさぐりで、その上うへをなでるのでした。
「山やまといふ字だ」長吉ちやうきちは二三日にちまへ前、寺小屋てらこやで
覺おぼえたばかりの「山やま」といふ字を自分自分よりず
つと年下とししたでしかも盲目くらの辰之助たしのすけが知しつてゐた
ので、いまいましくおもひました。辰之助たしのすけは
笑わらつて「ちや長吉ちやうきちさん、今度はお前まへの番ばんだ」
といつて、砂すなの上に「谷たに」といふ字をかきま



した。長吉はこまりました。知らないのです。「そんな字あるもんか。こんなことをして遊んでもつまらないから、他のここをしやう」長吉はきまりが、わるいのでごまかしてしまひましたが、盲目の癖に何でもよく知つてゐる辰之助が憎くてたまりません。どうかしてヒドイ目にあはして、うつぶんをはらしたいと思つて、「さあ、今度は、隠れん坊だ。ヂヤン、ケン、ポン……あ、辰之助は石をだしたね。皆は紙だから、お前が鬼だよ、お前は盲目だから、目かくしをしなくてもいゝ」なごご、憎まれ口をきいて、手をたゝきながらわざと川ツぶちへ誘ひました。長吉は辰之助を川の中へおごしてやらうと思ひついたのでした。辰之助は、さうごは知らないのなる方をたよりにすゝんで行くこ、突然、



「あツ」といふ叫び聲といつしよに、人が水におちた音をききました。ついで、「助け——」それは、長吉の聲です。長吉は、辰之助を、川へおこしてやらうとして、自分で足をふみすべらしてしまつたのでした。

「皆、来て！早く！早く！！」辰之助はふだんの恨もわすれて、大聲に叫び、自分の帶をほごいて、川に投げこみ、大さはぎでやつこ救ひあげました。長吉は、驚きで氣を失つてゐましたが、フト氣がついて目をひらくと、そこに、見えぬ目をしばたきながら、自分を介抱してゐるのは辰之助でした。「あツ、氣がついたぞ」と一人の子が嬉しうにさびあがりしました。「お、いきかへつた」と、他の子も叫びました。「わかりますか」ついで辰之助は、安心したやうに云ひました。長吉



は、自分のしたところが、心の底からはづかし
くなりました。悪かつたこ、おもはずにはあ
られませんでした。「ありがたう、勘忍して
おくれよ」長吉は、辰之助の手をこつて、涙
ぐみました。「い、よ。い、よ。これからは
みんな意地わるなんかしないで仲よくしやう
よ、ね」辰之助は、いままで、さんぐくから
かはれてゐた恨もわすれて、心からニツコリ
と頬笑むことが出来たのでした。

三

昨日の長吉は、もう今日の長吉ではありま
せんでした。長吉は、やさしいおもひやりの
あるおごなしい子になりました。みんなも、
辰之助の立派な行にうたれて、誰一人として
辰之助をしたはない者はなくなりました。仲



よくあそびました。揃つて勉強しました。そのあこでは、お母さんが御褒美に、お結飯を作つてくれました。い、お母さんでした。ところが、そのい、お母さんは、フトしたところから、病の床につくやうになりました。雨の降る晩、風の吹く日。幾日かたつて、野邊ではこほろぎが、さびしくなきはじめました。お母さんの枕元に据つてゐるこ「辰之助や」「はい」「私の教へた本はどの位覚えましたか」「もう、みんな闇記いたしました」「ぢやあ、きかせておくれ」「はい」辰之助はお母さんの枕元へ本をおいて、自分はそらでよみあげはじめました。お母さんは、さうしてゐるうちに、だんくくるしみはじめました。病氣が重くなつて來たのです。「お母さん、また痛みはじめたのではないのですか」「辰之



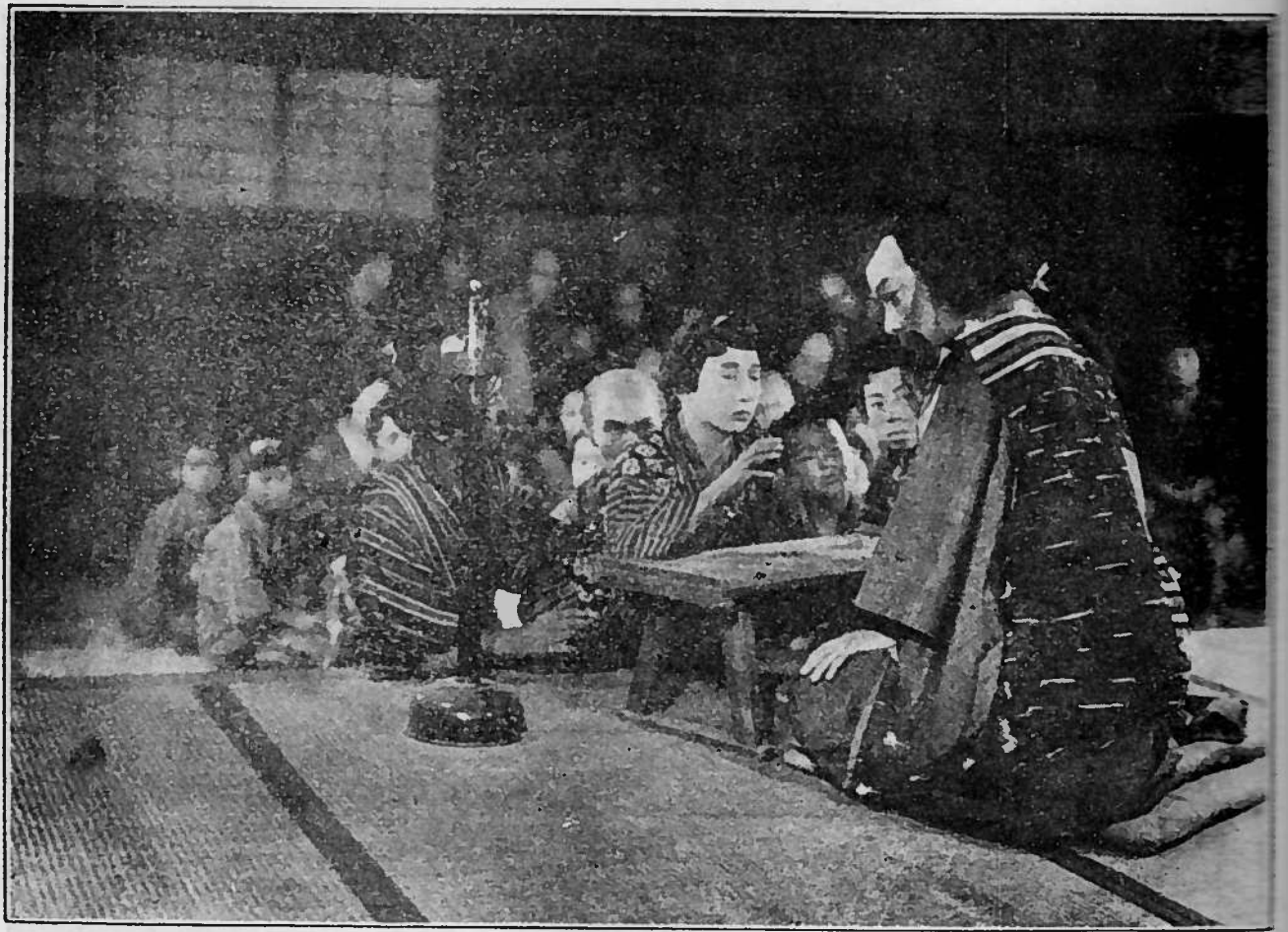
助は何だか變なのでフト口をつぐんで、様子をうかゞひました。「心配おしでない、止めないで、その先をおきかせ」お母さんは、病の苦しみをおしこらへてうながしました。辰之助はまた、そのつゞきをはじめましたが、だんく不安になつて「お母さん」ごよんでみました。「あ、つく、くるしい」お母さんは、たうごう我慢ができなくて思はず、呻きました。「あ、お母さんは、私が勉強のおさらしをしてゐたので、今迄苦しいのを我慢してゐたのですね」「辰之助、これがお別れです……。人は一代名は末代といふことを忘れずに……。お母さんにごつては、お前のその勉強の聲が、ごんな尊い坊さんのお經よりも、うれしい……。」「お母さん、しつかりしてください」「ごうか、その心がけをわす



れずに偉い人になつて、お、く、れ、よ」さ
ういつたかと思ふこ、お母さんはごうく崩
れるやうに、なくなつてしまひました。「あ
ゝ、私はひさりぼつちになつてしまつた」辰
之助は、氣を失つたやうに、冷くなつたお母
さんの亡骸に、ごりすがつてゐました。外で
は、虫の聲がかなしげに、泣きつゝけてゐま
した。

四

空のよく晴れた日でした。この村には、珍
らしい軍談師が來たさいふので、子供たちは
かりでなく、大人までが村の道をかけたして
行くのでした。けれども辰之助には、それを
きゝにゆく元氣もなく、裏の小川で、じつこ
物思にふけてゐました。水車は同じやうに



まはつてゐます。さあさあ水みづのこぼれる音ねをきいてゐると、亡なくなつたお母かあさんが、椽えん側がわで糸車いとぐるまをまはしてゐた姿すがたを思おもひだします。同じおなやうに水みづは流ながれてゐる同じおなやうに水車すいしやはまはつてゐる。それだのお母かあさんだけが亡なくなつてしまつた。辰之助たつのすけは、泣なくまいごしても、涙なみだがこみあげてきます。「また、ぼんやりしてゐるね」と長吉ちやうきちが、うしろにたつて聲こゑをかけました、辰之助たつのすけはあはて、涙なみだをかくして「長吉ちやうきちさんかい」「ウン、おや泣ないてゐたね。もう泣なかないで行ゆかうよ。面白おもしろいお話はなしがあるさうだから」長吉ちやうきちは、なぐさめるやうにいふのでした。「あ、いこう」辰之助たつのすけは、しよんぼりごたちあがりました。あまり行きたくはなかつたのですが、切角せつかく長吉ちやうきちがすゝめてくれるものですから。でも暫しばらくくして「辰之助たつ



助は、きてよかつたとおもひました。軍談師
 は「楠公父子」の話をしてみました。あの櫻
 井驛で正行と別れをおしむ正成の話、今度こ
 そは討死の覺悟をきわめて、「父亡きあこは
 父に代つて賊を討つてくれよ」といふところ
 でした。その言葉は遂々正行にとつて遺言と
 なつてしまひました。正成の首が、まもなく
 正行の許へこゞけられた時、正行の小さき胸
 は、逆賊への怒よりも、まづ父の死んだかな
 しみで、いつばいになつてしまひました。正
 行は、父から賜つた小刀をこりだして、父の
 あこを追はうこしました。「おまちなさい」
 母上の厳しい聲がしました。「父亡き後、今
 一度、戦をおこし、朝敵をほろぼして、再び
 君が代に返せとの遺言をわすれたのですか」
 「わすれはいたしませぬが、父上の首を見ま



したので急に悲しくなりまして——「今
はかなしんでゐる時ではありません」正行の
母はきつぱりこしていふのでした。「今は、
かなしんでゐる時ではありません」その言葉
が、辰之助の心に強くつよくひびきわたしま
した。「お母さんは、私が立派な學者になる
ようにこいつてむくなられた、私もさう思つ
てゐた、それなのに毎日女々しくお母さんの
なくなつたのを悲しんでゐるなんて、申わけ
がない」辰之助は正行の雄々しい決心に對し
ても、ふるひた、なくてはならないご心にち
かひをたてました。軍談師が一席をはつてか
ら、辰之助は、ツカ／＼ごその側へいつて、
「いまのお話は、おもしろうございました。
私も、よみたいのですが、そのお話は何とい
ふ本にあるのですか」「太平記といふ本ぢや



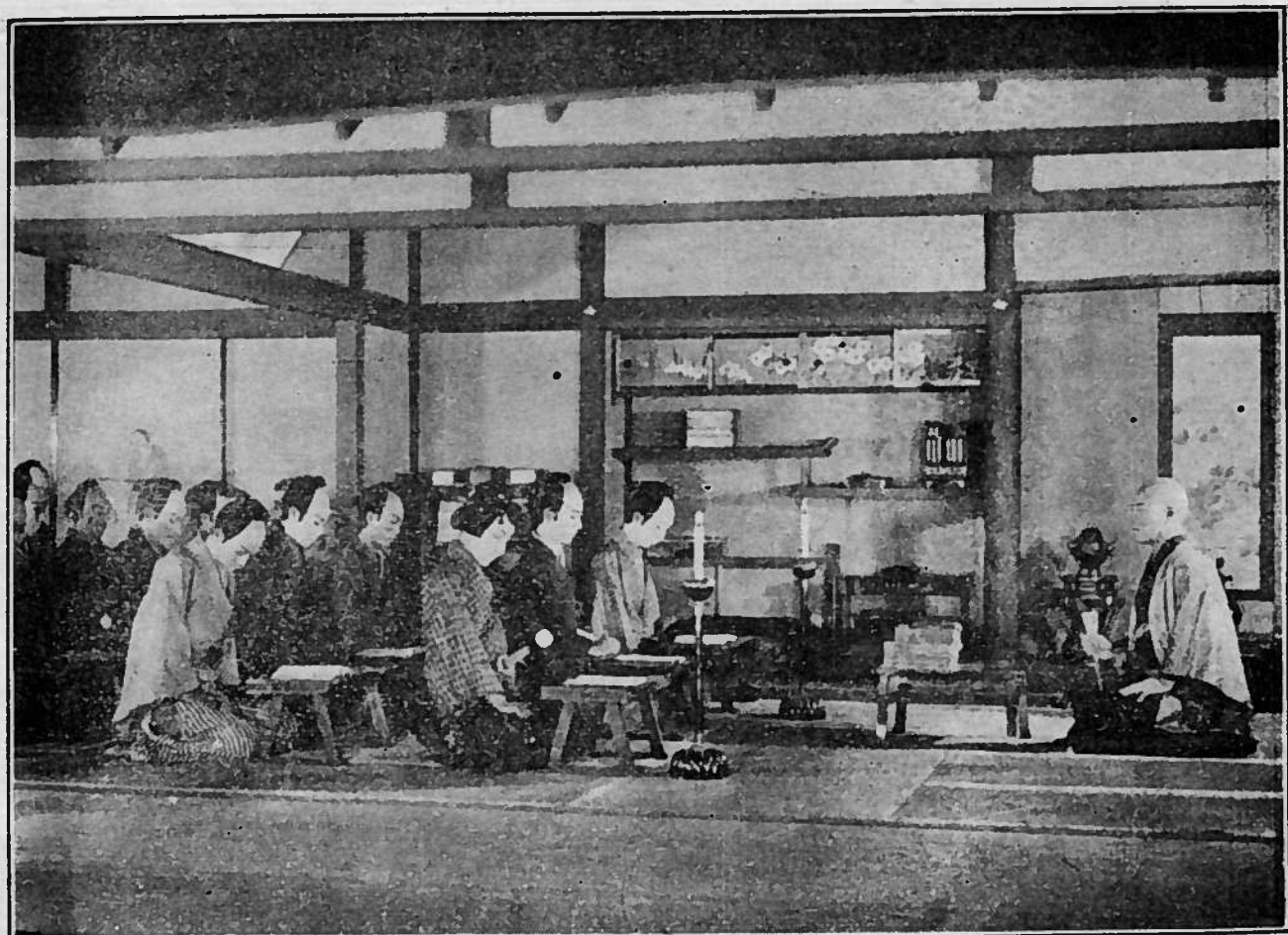
よ、花のお江戸では、太平記を暗記して、随分評判の高い人が多いこのこちや、だが、読みたいと云つて、お前は目が見ぬのではないかの」「はい、でも一度よんで頂けば、すぐ暗記するここが出来ますから」「は、ゝゝゝ」「ご軍談師はふきたしながらいふのでした」「しかし、太平記四十巻もあるのちやぞ、それを全部覚ゆることは、難かしいぞ、目明きの大人でさへ仲々覚えられんのちやからな、は、ゝゝゝ」「ご軍談師は、さもおかしさうにお腹をかゝねて笑ひくづれました。

五

辰之助は、軍談師に江戸へ連れて行つてくれさたのんだのですが「盲目ぢや駄目だよ」といつて、頭から。うけつけてくれません。



江戸へ行くらしい飛脚さんにも頼みよした。繭を買つてかへる商人にも頼みました、武家らしい人の袂にもすがりました。けれど、誰一人として、辰之助の願をきいてくれる人はありませんでした。「江戸へさへ連れて行つてくれさへすれば、ごうにでも學問をするものを」辰之助は、逢ふ人毎が「盲目ぢや仕やうがない」といつて、かまつてくれないので、また自分の盲目が情くなつてきました。「いつそのこと諦めてしまはうかしらん」辰之助は、さびしくさう思ひました。さういふ時に浮ぶのはお母さんの教へでした。岩に矢をさほした人の話でした。「あ、これほごまでにしても、まだ念力が足りないよ見ゆる」辰之助は深いためいきをつかずにはをられませんでした。ご、その晩のここです、不意に表



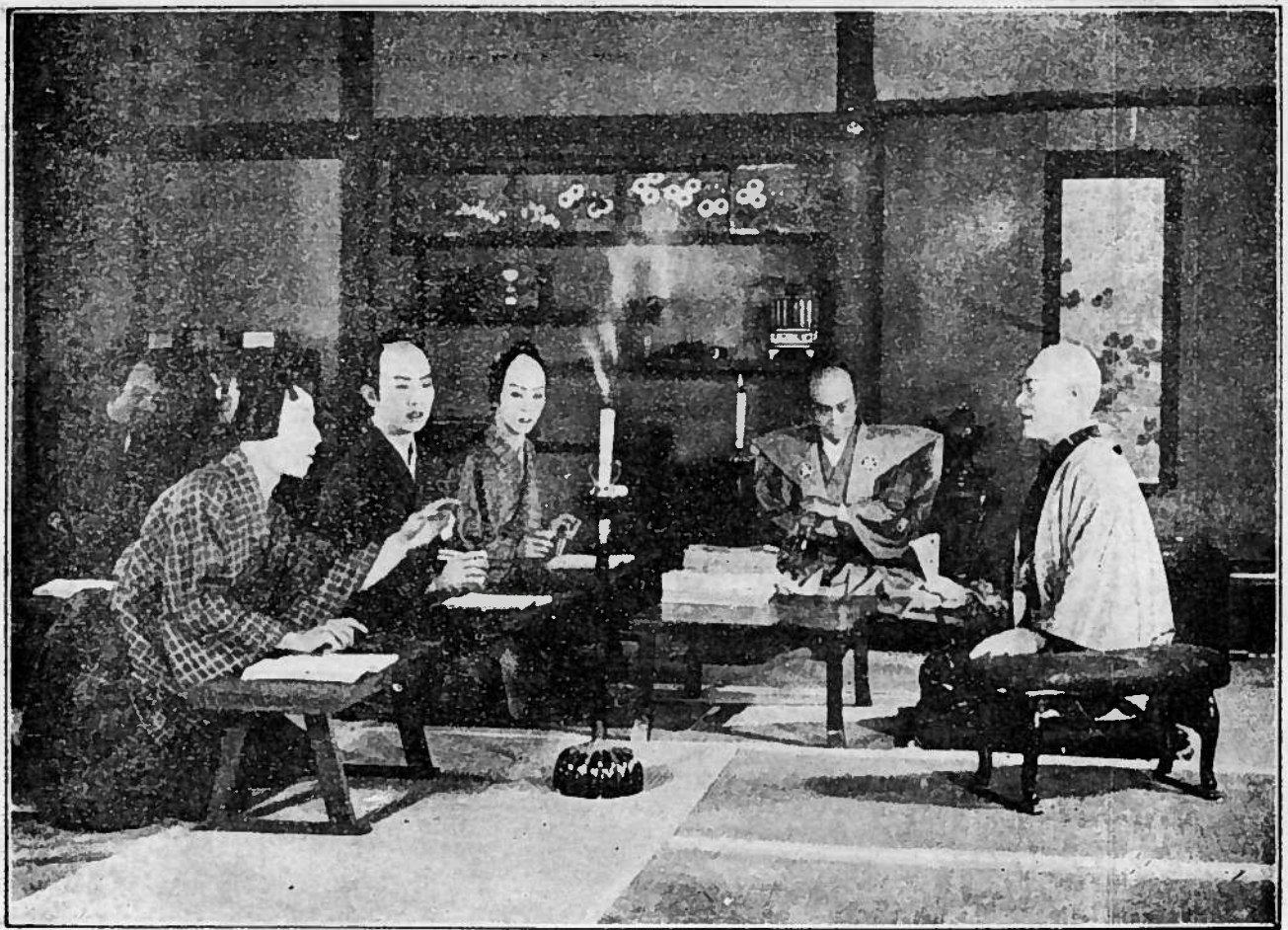
の戸を叩く者がありました。「もし、もし」
辰之助は氣味わるさうに立ちあがりました。
「ごなたです」一私ですよ、晝間の絹商人で
すよ」その人も、辰之助の願をふりすて、行
つたうちの一人なのでした。「何のごようで
すか」「ちよつとあけて下さい、辰之助さん
ごやら、一緒に江戸へまゐりませう、實は途
中まで行く道で、あなたが可愛さうになつて
引かへして來ました、あたしも江戸へ行つて
武家になる決心をしたんです、だから一緒に
江戸へまいりましょう」「ちや、ほんごにお
連れ下さるんですか」辰之助は、ころぶやう
に走つていつて戸をあけました。「ほんごで
すごも」「本當ですか」「ほんごです」辰之
助は、武家になりたいといふ絹商人の手を、
ひしこにぎりしめて、ふるへながら拜みまこ



た。「あ、ありがたうございます。この御恩は一生わすれません。翌日、二人は甲斐々々しい身仕度で、武州保木野村をたつて、江戸へこころざしてゆきました。「ぢやあ、辰之助さん、身体を大切になあ」見送りの村の人にまじつて、涙聲でいふ長吉の言葉を、うしろに――。

六

それから、何十年かのお話です。「私學講談所」がいふ學校で、大勢の弟子たちに教へてゐる盲目の學者がありました。塙保己一です。床の間の前には紋服美々しい町奉行根岸肥前守が座つてゐます。その肥前守が思ひだしたやうにいふのでした。「保己一ごのこうしてそばで、お主を見てゐると、やつは



り、ごここかに昔の辰之助の面影がのこつてゐるのう」「それはさうであらうな。だが、あの時の絹商人が、お主だとは誰も考へられんお互に岩に矢をつきこぼしたといふものであらうか」さういつて保己一は明るくわらつたあこで「まだ昔話がある。ゆつくりして行つて下され、私は教へかけた講義をおへてしまふから」ご弟子の方を向きました。「あ、先生、まつて下さい」ご弟子の一人が突然いひました。「今、風で灯がきれて字が見えませんから」「はてさて、目明は不自由だのう」保己一は、心からさう云ふのでした「は、昔、絹商人だつた根岸肥前守は思はず手をうつて笑ひこぼれました。(完)」

兒童藝術映畫協會役員

顧問

長岡隆一郎

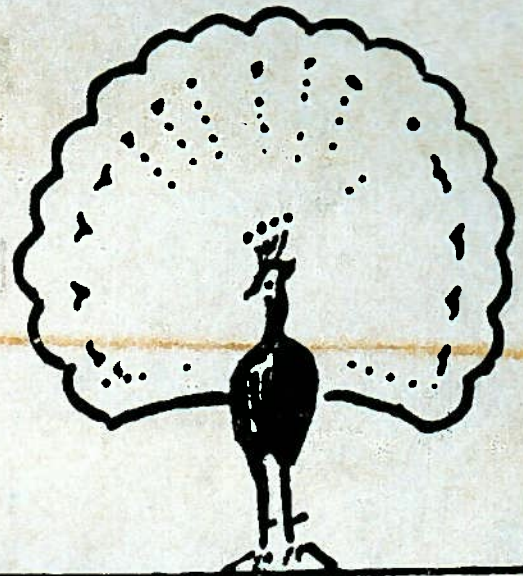
大野綠一郎

武部欽一

富田愛次郎

贊助員

安武直夫



兒童藝術映畫協會

東京市淺草區田島町五三

兒童藝術映畫協會

東京市吉田庄松平氏事務所

電話淺草(84)五九四番

三猿文庫

- 事務所 京都市上京區上立賣通室町西入 ●●●
- 撮影所 京都市下加茂松竹キネマ撮影所 ●●●

昭和三年九月二十日印刷
昭和三年九月廿五日發行

印刷兼發行 木村 馬